

歴史のきざしから

新連載

第1回

関東大震災

東京大学129年の歴史の中で、大学の存亡に関わる危機的イベントと言え、やはり、関東大震災であろう。この震災による建造物倒壊と連鎖的 화재により、本学は一時的に大学機能が麻痺するほどの壊滅的被害を受けた。しかし、その後、一般罹災者のサポートに尽力しつつ、力強く学府復興への道を歩み始めていく。

大正12年（1923年）9月1日、帝都・東京は抗し難い自然の脅威に見舞われた。関東大震災……マグニチュード7.9、死者・行方不明者10万人以上、避難人数190万人以上……地震による建造物倒壊も被害甚大であったが、それ以上に火災被害は大きかった。この日、関東全域に強風が吹いていたこともあって、火の手は一気に広がっていたのだ。

深刻な震災被害は本郷の東京帝国大学においても同様であった。まず、煉瓦建造物の多くが壁面倒壊・亀裂の被害に見舞われ、室内研究器物の多くが損傷した。

そして、火災。地震直後、工学部応用化学実験室（木造2階）、医学部薬学教室（煉瓦造2階）、同医化学教室（煉瓦造2階）、地下研究室から出火した。発火原因はいずれも薬品棚の倒壊。これらの出火元のうち、工学部応用化学実験室は全焼するも延焼は免れた。医学部薬学教室の火も消し止められた。しかし、医学部医化学教室の火は止まることを知らず、他の棟への延焼が始まったのである。

連鎖的大火災で焼けた建物は18棟。工学部応用化学実験室、医学部医化学教室、同生理学教室、同薬物学教室、図書館、法文経教室、法学部研究室、法学部講堂、法経教室（平屋）、理学部数学教室、法経教室2棟（二階建）、法学部列品館、度量衡器室屋根、撃剣柔道場、本部事務室、本部会議所、第一学生控所……これだけの建物がわずか2日間で焼失してしまった。

苛烈な震災火災被害を経て、最終的に使用不能となった建物延べ坪数は1223万9千50坪。これは当時の本郷キャンパス建物全面積の3分の1に当たる。いずれにせよ、東京帝国大学は一時的に半ば廃墟と化したのだ。

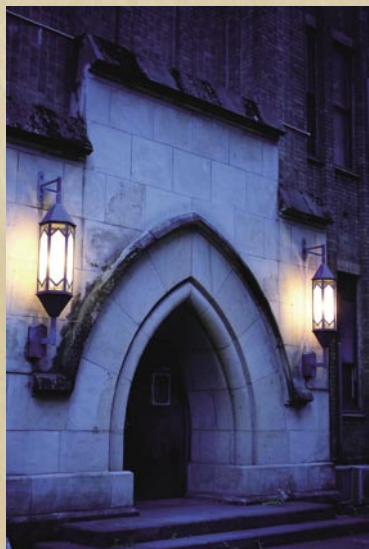
建造物被害もさることながら、大学にとってそれ以上の痛手となったのは書籍被害である。図書館では、炎上した後、一旦館外に非難した館員・学生が果敢にも書籍を搬出し始めた。が、最終的に75万冊におよぶ膨大な書籍がすべて灰と化してしまった。その中には内外の古写本、古版本、稿本、手沢本などの貴重な資料も含まれていた。これらの焼失は知の牙城を標榜する東京帝国大学にとって「死」に値する損失であったと言えよう。

図書館以外にも、各部局の書籍被害はきわめて大きかった。法学部では4万5千冊の書籍が焼失。標本4千点も焼失した。経済学部では4万冊の書籍がほぼ焼失した。しかし、当時、経済学部名物と言われた個性派職員・永峰巳之助の大活躍により、きわめて貴重な文献が救出（まさに救出である！）された。永峰巳之助は業火の中、建物に何度も入り、アダム・スミス文庫全巻、エンゲル文庫と田尻文庫の一部を搬出したという逸話が残されている。

事務方職員にとって書籍以上に大切なのが様々な学内文書である。総長室・事務局のあった山上会議所（現在の山上会館）は炎上したが、職員は文書すべてを弥生門脇の旧学生集会所に搬出し、幸いにも焼失を免れた。



75万冊の書籍が焼失してしまった図書館閲覧室内部（写真・左上）。そして、法学部講義室（写真・左下）と法学部講義室内部（写真・右）。この法学部講義室は「八角講堂」と呼ばれ、親しまれていた



震 災直後、東京の街はまさに焦土と化していた。人々は安全な地を求めて街を彷徨っていた。大学構内には人々が続々と避難し続け、ついには3千人におよぶ罹災者が集まった。

本学は、その創設以来、「公共の思想」に貫かれた大学である。営繕課は速やかに仮設住宅、給水用井戸、仮廁、電灯等を構内に設置し、罹災者の便宜を図った。附属病院では臨時救護班や伝染病部を設置し、内外の患者を収容。この年、9月から12月の間に臨時治療を施した外来患者数は1万4千余名、医院内に収容した患者数は1万800余名に達した。法学部では末広巖太郎教授をリーダーとして「帝大救護団」を結成。大学構内の警戒、罹災者の食糧・被服の配給、衛生設備の設置等に当たり、大いにボランティア精神を発揮した。また、大学のみならず上野公園に避難した罹災者の衛生改善や食糧配給にも奔走。さらには、末広の発案で「東京罹災者情報局」を設置。死傷者・避難者を調査して、地方からの問い合わせに対応した。

つまるところ、震災という非常事態に際して、本学の学生達は学生の役割を大きく越えた数々の貢献活動を行なったのである。実際、当時の帝国大学新聞（大正12年11月8日刊）には「この未曾有の大事変に際して、最も組織的な東大学生の活動は全く世人を驚嘆せしめ……」とある。それほど、彼らの活躍は目覚しかったのだ。

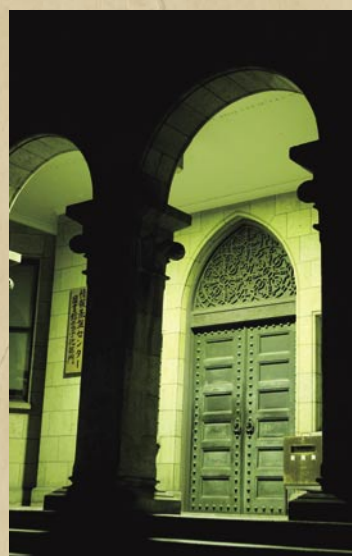
避 難者達のすべてが本学構内から立ち去ったのは地震の日から約2ヶ月後、10月の下旬であった。その後はもちろん、大学構内の復興を目指さねばならない。

75万冊の書籍を失った図書館の復興は、世界からの厚意によって実現した。建物は米国の実業家、J・D・ロックフェラー氏の寄付金400万円により建設され、図書・資料は国内有志および世界の様々な国々から寄贈された。その結果、震災から数年後には焼失した書籍の量を回復するに至っている。

さて……大学は建物の本格的復興整備を工学部教授・内田祥三に依頼した。内田は営繕課長を兼務する形で建築整備を請け負うこととなったが、その際、ひとつの条件を出した。その条件とは「復興の建築実務を大学の担当講座の一部として行なう」ということ。もちろん、大学側はこれを認め、内田は建築学科の卒業生や教官達を動員して「東大自前の」復興整備を開始したのであった。

その後、内田営繕課長のもと、多くの建物が造られ、本郷キャンパス全体が内田建築により形作られることとなる。それらの建物はゴシック調の美しいデザインに統一され、後年、「ウチダゴシック」と呼ばれるに至った。内田祥三はその後、建築学会会長等を歴任し、昭和18年（1943年）、本学総長に就任した。

未曾有の危機から力強く復興を遂げた東京帝国大学。その生命力は国立大学法人東京大学となった今も脈々と受け継がれている。



参考資料／東京大学百年史（通史二）、東京帝国大学五十年史、東京大学本郷キャンパス案内（木下直之・岸田省吾・大場秀章・著 東京大学出版会刊）